

海うさぎ

一

夜明けの海に、うさが飛んでいる。

井戸端で顔を洗うと、ほうはわざと手拭いを使わず、ぐん！と頭を振って水滴を跳ね飛ばした。心地よく澄んだ夏の朝、みるみるうちに額や頬が乾いてゆく。目が覚めてゆく。

気づいてみれば、この井上の家で日々を過ごすようになって、半年が過ぎた。ここに来たばかりのころは、井戸端からながめる景色のあまりの素晴らしさに、水を汲んだり洗い物をするたびに、やっぱりこうして手を止めては見とれたものだった。そんなところに来合わせると、琴江さまはいつも優しく、海を指さし、空を仰いで、その日その日の海の色の違いや、季節ごとの潮の流れの道筋や、夕べの波の立ち具合で明日の天気を占えることや、あれこれの星の名前を教えてください。

「ほう、見てごらんさい。風はこんなに静かなのに、海には白い小さな波が、たくさん立ち騒いでいるでしょう。ああいうとき、この土地の者は、うさが飛んでいる」というのよ。うさが飛ぶと、今はお天気がどんなに晴れていても、半日と経たないうちに大風が吹いて雨がくるも

のなの。だから、海にうさぎを見ると、漁師は早くに舟を返してしまっし、紅貝染めの塔屋では樽に覆いをかけてしまいます。遠目で見ると、小さくて白くてきれいなうさぎだけれど、それは、空と海が荒れる前触れなのですよ」

ここに根づいて暮らせば、そうした事どもも、すぐに覚えることができるだろう、覚えればまたこの土地に親しみがわくだろうと、琴江さまはおっしゃった。たった一人、見知らぬ土地に取り残されたほうにとっては、その言葉がどれほど有り難いものだったか、半年前よりは少しばかり知恵が付き、しつかりしてきた今となっても、どうてい言い表すことなどはしない。

ほうは襷を締め直すと、元氣よくからがらと釣瓶を引っ張って水を汲んだ。夏のあいだ、毎朝こうして、冷たい汲み上げの水をお座敷の皆様の洗面にお持ちするのが、ほうの役目のひとつだからである。

朝の煮炊きも、洗面のお世話も、ほうのような者にはどうてい任せられないが、水を運ぶくらいなら力さえあればいいのだから用が足りるだろうと、しずさんはいつも言っている。自分の足りないところについては、今さら言われるまでもなく、ほうはよく承知している。なにしろ名前「ほう」は、阿呆のほうだ。

十年前の大晦日——あとほんの半刻で御来光がさしかけ、新しい年が始まるというその時に、難産の末にほうは生まれた。江戸市中、内神田の建具商「萬屋」の、じめじめして陽のあたらない女中部屋で。

ほうのおっかさんという人は、煮くずれた芋のようにぐずぐすとだらしない女で、怠け者で、そのくせ強欲で、男たらしであつたそうである。もつともこれは、ほうが萬屋の人たちから聞かされた話だから、おっかさんにはおっかさんの言い分があつたかもしれない。だが、それを聞く機会はなかつた。ほうを生んだ後、間もなくおっかさんは死んだ。

ほうは、おっかさんが萬屋の若旦那を通じてこしらえた子供だつた。最初から、萬屋にとつては仇であつた。育たずに死ぬことを望まれた赤子であつた。おっかさんが死んでしまったのだから、なおさらだ。だが、ほうは生き延びた。

萬屋としても、赤子の生きる力が足りずに死ぬならいいが、若旦那の胤だとわかっているのを、敢えて手にかけるのは後生が悪い。仕方なしに、半月、ひと月、ふた月とほうを生かしておいた。

そして三月目に、諦めたようにため息混じりで名前をつけた。それが「ほう」だ。名付け親はそのころの萬屋の主人、若旦那の父親だ。本当は若旦那を「この阿呆めが」と叱りつけたい気持ちで、赤子の名前に込めたのだろう。

そうしてほうは萬屋を出され、お店の奉公人の誰かの縁戚だという家に預けられ、八つになるまで、そこで育つた。金貸しの老夫婦二人の家で、ほうが曲がりなりにも物心ついたころには、二人とも神様より年寄りに見えた。ほうを引き取つたのも、老後の面倒をみさせようという目的があつたからだ。萬屋では、毎月いくばくかの金子を、預かり料として包んでいたようだが、老夫婦は金ならそこそこ持っていた。ただ、元気に立ち働く手足を失いつつあつただけである。

ほうは、いづれそれを助けるための人手であつた。

しかしその割には、いや、それだからこそか、金貸し夫婦はほとんどほうにかまわなかつた。

食べ物も気まぐれに与えられるだけ、躰らしい躰もなく、犬の子のように放つておかれた。だからひつきりなしに病にかかつたし、ひよろひよろに痩せて、三つぐらいになるまで一人で立つこともできず、言葉もろくにしゃべれなかつた。老夫婦は、子供などはほつたらかしかしておいても育つと思つていたのである。そして育ちあがつたら、びしびし鍛えて顎で使えばいいのだ、と。

もしもあのままだつたなら、今ごろどうなつていただろう。ほうは、こうして井上の家に落ちて着いてから、たまに、考えることがある。本当の野犬のような子供に育つて、手に負えないと、金貸しの家からも追い出されてきたかもしれない。身体がもたなくなつて、おっかさんのいるところに逝つていたかもしれない。

ほうが九つになつた、正月明けのことである。金貸しのところに、萬屋から大番頭が遣いに来た。松は取れたとはいえ、まだおめでたい気分が残っているころなのに、煤けたような不機嫌な顔で、両の眉のあいだに雨水でも貯めようかというほどの深いしわを刻んでいた。

先年の秋口から、旦那さま、若旦那さまが立て続けに病みついて、最初はただの風邪かというぐらゐの様子だつたのが、次第次第に挨が溜まるように病が積みあがつて重篤になり、今は二人とも枕のあがらない様子だと、大番頭は告げた。萬屋は、いくつかの譜代名家にも出入りする格式のある商家だから、こんなことをうつかり表沙汰にするわけにはいかない。商いの方はお店

の者と職人たちで何とかしているが、それにしても心配は募る。「それでこのたび、さるところから名のある修験者をお呼びして、加持祈禱の上、ご託宣をいただいたのですが」

不遇に死んだ奉公人の魂が、萬屋を恨んでいる。それが障りになっていると言われたという。「そう言われて、思い当たるのはほうの母親ぐらいのものです。まったくあれは性悪女だ。死んでからもまだ祟りおる」

修験者は、この障りを取り除くためには、萬屋を恨んでいる死者の縁につながる者を、萬屋の深く信心している寺社へ送らねばならぬと言ったそうである。

「そうなるよ、それもまたほうしかいないことになりました」

大番頭は、にがよもぎを噛むように言葉を噛んだ。

「ご託宣では、その子が男の子ならば寺子として差し出すのがいちばん良いということだったが、ほうは女の子だ。つくづく用が足りない。それでも、寺社へ送って拜ませるだけでも効き目はあるとおっしゃるので——ここはひとつ曲げて、ほうを萬屋に返してはいただけませんか」

ほうがいなくて困るところがあるならば、代わりの女中でも探そう、寂しいというならば貰い子も世話しようという申し出を、金貸しの夫婦はすぐに承知した。

こうしてほうは、萬屋に帰った。頑是無いなりに、自分が何処かに遣られることはわかっていて、それが江戸から何百里も離れた見知らぬ遠い土地だとは、さすがに思いもよらなかった。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。